

入 賞 作 品

順位	賞	選	者	得点	作品番号	作	品	地区	作	者
1	北海道知事賞	淳男・奈・敦・千・小・美・研和勝・石	①	13	69	切手ほどの灯台の窓鳥渡る		岡崎	水野	幸子
2	北海道議会議長賞	末・紅・智・岬・千・吟・勝・久	①	11	500	もう五分待とうマフラー巻き直す		北見	真壁	静江
2	札幌市長賞	智・千・吟・美・和・康・鉄・泰・久	①	11	259	落葉踏む嬉しき時は良き音に		札幌	斉藤	みつ子
2	札幌市教育長賞	末・千・研・き・芳・哲・光和・佳・野・石		11	425	寒波来る地球の軋む音のして		江別	西村	榮一
3	北海道新聞社賞	淳・こ・敦・草・研・鉄・勝・佳・野・石		10	41	灯を消して螢に闇を譲りけり		石狩	赤繁	大河
3	朝日新聞社賞	男・紅・岬・千・小・吟・研・榮・勝・英		10	169	皴の手にクリーム勤労感謝の日		小樽	石井	こう子
4	読売新聞社賞	奈・こ・草・哲・勝・野・久・英	①	9	315	雪晴や市電の映る理髪店		札幌	宮ヶ丁	孝子
4	HBC北海道放送賞	男・岬・敦・典・研・き・勝・石・英		9	53	割算の余りのやうに生きて秋		札幌	平川	靖子
4	STV札幌テレビ放送賞	敦・千・小・草・典・光和・泰・石		9	58	月光の雫を絞る軒氷柱		札幌	小松	正幸
4	俳人協会北海道支部賞	奈・智・敦・千・き・芳・勝・泰・野		9	305	早蕨や風車の丘へ牛放ち		札幌	池上	純子
5	俳人協会北海道支部賞	紅・岬・敦・千・小・泰・佳		8	227	廃鉦の立坑 櫓十三夜		札幌	谷口	浩文
5	俳人協会北海道支部賞	紅・智・小・き・康・勝・野・石		8	26	日向ぼこうとうと昭和へと戻る		旭川	斎藤	良子
5	俳人協会北海道支部賞	紅・こ・吟・草・光・榮・野・久		8	159	逆上がり教へ合ふ子ら若葉風		札幌	佐藤	やす美
6	俳人協会北海道支部賞	①・和・鉄・泰・野・英	①	7	416	新涼の垂直に立つ米袋		札幌	陽	美保子
6	俳人協会北海道支部賞	岬・小・き・光・泰・野・石		7	83	蝦夷富士のふんはり歪む石鹼玉		小樽	橋本	和男
6	俳人協会北海道支部賞	小・美・芳・光・野・石・英		7	127	ふるさとの紅葉栞りし時刻表		札幌	吉野	早苗
6	俳人協会北海道支部賞	男・奈・研・芳・光・勝・久		7	387	花詞信じて買ひぬ種袋		大樹	伊藤	やす

				順位
				賞
				選者
				得点
				作品番号
				作品
				地区
				作者
		奈・小・光・康・榮・泰・英	①末・淳・智・敦・典・研・野	入賞は一人一賞となっておりますので左記高得点句は「賞外」として掲載します。
		7	8	
		308	51	
		廃 駅 の 海 抜 表 示 震 災 忌	一 本 の 棒 に な り た る 捨 案 山 子	
		札 幌	札 幌	
		池 上 淳 子	平 川 靖 子	

特選句と選評

飯川 久子 特選

500 もう五分待とうマフラー巻き直す 北見 真壁 静江

選評 人との待ち合わせは、なかなか思う様にはいかないものである。マフラーを巻き直し、あと五分といい切ったことが、この句の眼目である。

石井 こう子 特選

66 二人目のお産おほらか新松子 新十津川 金行 康子

選評 初産と違い二人目の子の出産となると私も経験しましたが、気持ちに余裕があり真に多らかで、とは言っても些かの緊張感も。青々とした新松子の季語に、お気持ちの様子が見取れ特選句に頂きました。

生出 紅南 特選

96 廃校の空もガラスも鱗雲 苦小牧 高谷 節子

選評 この十数年で廃校になったところは多い。地域の核としての学校が廃校になる。淋しいことだ。そんな廃校舎の窓ガラスに鱗雲が写っている。勿論、空には鱗雲。移りゆく季節、廃校の有り様を活写。

大内 鉄幹 特選

116 ラガー等のあひ撲つ五体軋みけり 帯広 山下 敦

選評 ラガーとはラグビーの俗称。冬枯れの関東平野に男達がぶつかり合う景を思う。スクラムを組む力と力の激突に体が軋むという一瞬を捉えた「眼前直覚」の句だ。軋む音が今にも聞えて来る様だ。

岡澤 草司 特選

108 熊除けの鈴響き合ふ秋の山 札幌 高田 喜代

選評 山での仕事や登山には熊除けの鈴は欠かせません。その鈴が響き合うのは安心ですが、秋の山の景色を引き立てる役割も果たしているようです。多くの登山者の安全への祈りも感じられるようです。

尾村 勝彦 特選

500 もう五分待とうマフラー巻き直す 北見 真壁 静江

選評 約束の時刻が過ぎても相手が姿を見せない。待ち合せにはしばしばあること。たぶんもう来ないだろう。だか今しばし…じりじりするような思いが切ない。遠き日の思い出か。

金行 康子 特選

99 立冬や日向に止まる園児バス 岩見沢 井上 厚明

選評 お産サポートの為に滞在していた娘宅で選句を致しました。上の子の幼稚園バス停への送迎を日課としていましたので、何気ないこの一句の優しさが心に響きました。中七の措辞が事実と真実だと。

金田 野歩女特選

315 雪晴や市電の映る理髪店 札幌 宮ヶ丁 孝子

選評 作者は市電からの目線か、通りを歩いての景か。どちらにしても理髪店の磨かれた大きな窓に、のんびり走る電車を見ている。被写体の電車と雪晴れの空の青さとが相俟って強く印象付けられた。

狩野 和子特選

322 一杯の白湯の喉越し今朝の冬 函館 斉藤 ふじお

選評 白湯を飲むのが習慣なのでしょう。しかし、今朝は違う。今日は立冬なのである。やがて容赦無く迫って来る雪や寒さに対峙する覚悟と言うのか、気魄も感じました。

河原 小寒特選

416 新涼の垂直に立つ米袋 札幌 陽 美保子

選評 糶摺機の排出口から次々と吐き出される新米。下で待ち受ける紙製の米袋。米自身の重みで米袋はしっかりと垂直に立つのだ。「垂直」が上手い。季語「新涼」と併せて収穫の喜びが立ち上る。

久保田 哲子特選

148 淡雪の手に掬いても刹那かな 釧路 山本 ひろし

選評 淡雪そのものを詠むのは難しいのですが、「手に掬いても」と対象に一步踏み込んだことにより、情景を鮮明にしたと思えました。

熊谷 佳久子特選

417 安達太良山に無垢の空あり連翹忌 札幌 尾村 勝彦

選評 高村光太郎の「智恵子抄」の世界。無垢の空とは、安達太良山の空、そしてけがれのない智恵子を指している。高村山荘を訪れた時の感慨が心に残っていて、気持良く読ませてもらい印象的な俳句。

清水 芳堂特選

419 冬日いま呑まんと海の沸騰す 札幌 尾村 勝彦

選評 「冬日をいま」の「を」が省略されて一句のリズムを保っている。暗い紺青の冬の波濤の様を「沸騰」と捉え、座五に据えたのは、詩情を更に高め、読み手の詩心を満たす。時間と空間の合致。

滝谷 泰星特選

259 落葉踏む嬉しき時は良き音に 札幌 斉藤 みつ子

選評 落葉を踏む音は、落葉の種類や量、朽ち具合などによっても違う。でもこの句はそのことには気遣わず「嬉しき時は良き音に」聞えるという。主観を主体とした詠み方がおもしろい。

辰巳 奈優美特選

171 かなしみは小房に分けて花椰菜 比布 村 一草

選評 その「かなしみ」は突然のものか、或いは心中に抱えていたものか。くり返す日常の厨事の中で「小房に分け」るように、少しずつ軽くなることもある。 「花椰菜」の白に心の機微が映しだされた一句。

田湯 岬特選

194 産み了へし鮭に瀬音のうすれゆく 札幌 池野 やまべ

選評 産卵を終えた鮭は、生きる目的を全て達成し、静かに死を待つだけとなり、水に流されています。次第に意識が薄れやがて瀬音さえも聞こえなくなるのです。自分もこういう死を迎えたいものです。

大郷石 秋特選

69 切手ほどの灯台の窓鳥渡る 岡崎 水野 幸子

選評 灯台の窓を、切手ほどと捉えた感性の豊かさを伺うことが出来る。また、切手の発想は同時に、北方からの渡り鳥が、秋の便りを運んで来たと、感じたことであろう。作者の立ち位置も見える。

土門 きくゑ 特選

282 どの子にも冬日分け合ふ鬼ごっこ 函館 住吉 紀美子

選評 道具を必要としない鬼ごっこ。雪の上を走り回る子らの景が浮かぶ。ゲームなど一人遊びをする子が増えているが、人と触れ合う遊びは成育に不可欠。どの子にもという上五に、慈愛の目差を感じる。

中村英 史特選

160 夕焼をゆつくり仕舞ふ手稲山 札幌 佐藤 やす美

選評 日常見ている景を日常使用する語をもって詠んだ句。単純で明快な誰にでも解る句。「ゆつくり仕舞ふ」という表現は何とも言えず、しつとりと快い。明日の晴れを保証しているかのようだ。

中森千尋 特選

500 もう五分待とうマフラー巻き直す 北見 真壁 静江

選評 久しぶりの待ち合わせ。約束の時間が過ぎゆくなか、思いを巡らす作者。「もう五分」待つと言う直向きさに心ひかれる。いまは携帯もあり連絡を取りやすい時代だが、青春の一頁かとも。

中屋吟 月特選

259 落葉踏む嬉しき時は良き音に 札幌 斉藤 みつ子

選評 落葉を踏みしめる感触は様々。憶い深まる時には凋落の音ともなり、この句の様に嬉しさを抱える時には、心做しか少々浮き立った良い音として聴こえる。落葉には人の心に韻くものがある。

名取光 恵特選

109 月明の水脈隆隆と鯉船 福島 清水 芳堂

選評 一読、実景が活写されていて、眼前に景が広がりました。「月明」「水脈隆隆と」「鯉船」の幹旋が見事で壮快な句に感銘致しました。

成田智世子 特選

376 旅立ちの札幌駅のストープよ 北竜 山岸 正俊

選評 作者、何歳の旅立ちか。集団就職の頃かとも。その頃の札幌駅には、大きなダルマストープが赤々と炎を立てていた。歳月を経たいまも作者の胸にその火色と、ぬくもりが残る。「よ」の一字も効用。

西村 榮 一特選

226 古文書の読めぬ崩し字地虫鳴く 札幌 谷口 浩文

選評 古文書を読むには崩し字の知識がなければ読む事が難しい。また知識があってもさらに崩されると前後の關係で読む事になります。季語の「地虫鳴く」が作者の心に響いて良い。

橋本 和 男特選

30 枯れ尽くすまでの光陰濡れ仏 札幌 大澤 久子

選評 田畑の収穫が終えた土地や、旧街道の道の辺であろうか。古びた石仏が濡れたように佇んでいる。永遠に続く時の流れにやがて土に還るのであろう。「光陰濡れ仏」の表現が魅力的。

橋本 末 子特選

51 一本の棒になりたる捨案山子 札幌 平川 靖子

選評 風雨に晒されて一本の棒になってしまった案山子。現役時代はさぞかし活躍してくれたであろう。無惨にも頭も手足もない。その姿に作者は胸を打たれたのである。

畠 典 子特選

254 蝦夷の地に生まれて老いて三平汁 札幌 岩城 睦子

選評 「生まれて老いて」の言葉の使い方に、なる程と思えました。色々な事を語らずとも人生、そして人柄、その地の様子がよく理解できました。下五の三平汁が句を引き締めていて、ほっこりと致します。

花木 研 二特選

396 オホーツクの制空権や尾白鷺 札幌 大内 鉄幹

選評 オホーツクの海も陸も凌駕する尾白鷺の姿を、余す事無く堂々と詠み切りました。類想を許さないその姿勢も立派で、丸ごと賛意の一句でした。

森 淳 子特選

265 ウクライナへ思ひを馳せる夜長かな 上富良野 山内 敬子

選評 何故人間は戦を始めるのでしょうか。今も世界の彼方此方で戦争が続いています。跣で逃げ惑う子供達の姿を見るにつけ怒りと悲しみを感じます。平和な世界が一日も早くと願います。

山下 敦 特選

227 廢鉞の立坑槽十三夜 札幌 谷口 浩文

選評 秋深まる「十三夜」の月影に浮かぶ「立坑槽」のシルエツトが印象的。時の流れに思い致す作者の心情も読み取れる。動詞に頼らず、もっぱらものを詠む文体も句意に適い、余情が深い。

陽 美保子 特選

69 切手ほどの灯台の窓鳥渡る 岡崎 水野 幸子

選評 灯台の窓を表すのに「切手ほど」とは類想がなく、詩情がある。作者と灯台の距離感がわかり、その上に大きく広がる青空が見える。「鳥渡る」の季語が効いている。